【論　文】

青年・成人用愛着パターン尺度の作成の試み

上地雄一郎・牧野史奈・山下明子・神谷真由美
（岡山大学）　（岡山大学）（岡山大学）（信州大学）

青年・成人の愛着を測定するわが国の質問紙尺度には，大別して，(1)安定型，回避型，アンビヴァレント型の愛着を測定する尺度，および，(2)（見捨てられ）不安と（親密性）回避を軸として４つの傾向に分ける尺度が存在する。しかし，(1)の３類型尺度には，Bowlby-Ainsworth による愛着の定義とかけ離れた項目がみられ，(2)の４類型尺度については，不安と回避を軸にして 4 つの傾向を分ける視点が適切かどうか疑問が残る。本研究では，Bowlby-Ainsworth モデルにおける愛着の定義にできるだけ忠実に項目を作成し，安定型，回避型，アンビヴァレント型の愛着パターンを測定する青年・成人用の尺度を作成し，信頼性と妥当性の検討を行った。作成された「愛着パターン尺度」の因子的妥当性およびα係数は高く，「甘え」および「孤独感」との関連から，ある程度の妥当性が確認された。

キーワード：愛着，質問紙尺度，愛着パターン尺度

問題と目的

愛着(attachment)とは，「特定の他者との間の強い情緒的絆」(Bowlby, 1979/1989, p.151)であり，苦痛な状態のときにそこから「安心と慰め」(security and comfort)が得られることを特徴としており(Ainsworth, 1989)，また「愛情」(affection)を伴っている(Bowlby, 1979/1989；Ainsworth, 1989)。まとめて言えば，愛着とは「苦痛な状態のときに安心と慰めの源となるような，特定の他者に対する愛情の絆」と定義される。注意するべき点としては，（絆としての）愛着と愛着行動を混同しないことである。愛着行動とは，（絆としての）愛着を形成し，維持し，発展させようとする行動，別の言い方をすれば愛着人物との近接（proximity）を達成し，維持しようとする行動である（Bowlby, 1979/1989, Ainsworth et al, 1978)。愛着行動がみられるからといって（絆としての）愛着が形成されているとは限らず(Cassidy, 2008, p.13)，両者は概念的に区別するべきである。

愛着が十分に形成されており，愛着主体が愛着対象を安心と慰めの源として信頼し，苦痛な状態のときには進んで愛着対象からの助けを求めるときに，その愛着のあり方を「安定型」と呼び，そうでない愛着のあり方は「不安定型」と呼ぶ。子どもの不安定型には，回避型（avoidant)，アンビヴァレント型(ambivalent)，無秩序-無方向型(disorganized-disoriented)がある。成人の場合には，安定型を「安定-自律型」，回避型を「軽視型」(dismissing)，アンビヴァレント型(ambivalent)を「とらわれ型」(preoccupied)と呼ぶことがある。

このような愛着パターンの分類法としては，乳児に対して使用される「ストレンジ・シチュエーション」(Ainsworth et al, 1978)が有名であるが，幼児や児童の愛着を分類する方法も開発されている。次に，青年・成人の愛着の分類法としては，面接法や質問紙法が用い

られている。青年・成人の愛着は，「親に対する愛着」と「パートナー（恋人や配偶者）に対する愛着」が区別されている。前者の測定法としては「成人愛着面接」(Adult Attachment Interview:AAI)が有名であり，後者の測定については様々な質問紙が開発されている。

青年・成人のパートナーへの愛着を測定する質問紙においては，愛着のパターンを，安定型，回避型，アンビヴァレント型に分ける3分類法と，安定型，軽視型（回避型），とらわれ型(アンビヴァレント型)，恐れ型に分ける4分類法が並存している。そして，それぞれにおいて，強制選択法による質問紙と他項目式の質問紙がある。3 分類法による質問紙は，Ainsworth の分類法を土台にしており，Hazan & Shaver(1987)の強制選択法式尺度から発展したものが多い。Hazan & Shaver(1987)は，下記のような選択肢を回答者に示し，自分にあてはまる選択肢を 1 つ選んでもらうことによって回答者の愛着の類型を決定した。

①安定型選択肢：「私は，比較的すぐに他者と親しくなるほうだし，自分が他者に依存することについても，他者から依存されることについても，不快とは感じない。私は，自分が見捨てられることや誰かから親しくされすぎることについて，たびたび思い悩むことはない。」

②アンビヴァレント型選択肢：「他者は，私が望んでいるほど親しくなってはくれない。私は，恋人が本当は私を愛していないのではないか，私と一緒にいたいと思わないのではないかと心配することがよくある。私は他の人と距離のない一体の関係になりたいと思っており，この願望を恐れて人が私から遠ざかることがたまにある。」

③回避型選択肢：「私は，他者と親しくなることをやや不快に感じる。私には，他者を完全に信じることは困難だし，自分から他者に依存することも困難である。誰かが私に対してあまりに親しくしようとすると，そして，よくあることだが，恋人から私にとって快適な程度を越えた親密さを求められると，私は緊張して落ち着かなくなる。」

一方，4 分類法に基づく質問紙は，Bartholomew & Horowitz(1991)の強制選択法による愛着分類から発展したものである。Bartholomew & Horowitz(1991)の愛着分類は，以下のとおりである。

①安定型(secure)選択肢：私は，他者と情緒的に親しくなることに苦労しない。私は，自分が他者に依存することも他者から依存されることも，心地よく感じる。自分が 1 人になってしまっても，他者から受け入れてもらえなくても，私は気にしない。

②恐れ型(fearful)選択肢：私は他者と親しくなることを不快に感じる。私は，情緒的に親しい関係を求めているが，いざとなると他者を完全に信じることが難しく，他者に依存することも難しい。他者とあまりに親しくなると自分が傷つくのではないかと心配である。

③とらわれ型(preoccupied)選択肢：私は，他者と完璧なほど情緒的に親密になることを求めているが，他者は私が望むほど親しくしてくれないことがしばしばある。私は，親しい関係なしでいることを不快に感じるが，私が他者を肯定的に評価していても他者は私をそれほど肯定的に評価していないのではないかと心配である。

④軽視型(dismissing)選択肢：私は，親しい関係がなくても快適である。私にとっては，自立しており，自分の欲求は自分で満たしていると感じることが重要であり，他者に依存することも，他者から依存されることも，私は好まない。

Brennan と共同研究者たち(Brennan, Clark, & Shaver, 1998)は，こうした自己報告式の複

数の愛着尺度を因子分析した結果，「不安」と「回避」という 2 つの因子を抽出した。そして，この 2 側面を測定する多項目式の「親密関係体験質問紙」(Experience in Close Relationships Questionnaire : ECR)を作成した。そして，Brennan らは，この「不安」と「回避」に対応する内的作業モデル（表象）を想定し，それぞれを「自己についてのモデル」〔＝自己観〕と「他者についてのモデル」〔＝他者観〕と呼んだ。つまり，ECR における「不安」および「回避」の高低によって回答者を 4 群に分けると，以下のようになるということである。

①安定群：不安得点が低く（自己観がポジティヴ)，回避得点も低い(他者観がポジティヴ)
②恐れ群：不安得点が高く（自己観がネガティヴ)，回避得点も高い(他者観がネガティヴ)
③とらわれ群：不安得点は高いが（自己観がネガティヴ)，回避得点は低い（他者観がポジティヴ)
④軽視群：不安得点は低いが（自己観がポジティヴ)，回避得点は高い（他者観がネガティヴ)

日本で開発された青年・成人向けの質問紙式愛着尺度のうち強制選択法によるものは，上記の Hazan & Shaver(1987) と Bartholomew & Horowitz(1991)の尺度を日本語化したものである。多項目式愛着尺度のなかで，詫間・戸田(1988) の「愛着スタイル尺度」は，愛着の 3 分類に基づいて，「安定性」「回避性」「両価性」を測定する下位尺度から構成されている。しかし，この尺度は，項目の一部に愛着の原義から遠い内容のものが含まれており(例えば，「私は人に好かれやすい性質だと思う」とか，「あまり自分に自信がもてない方だ」など)，これらの項目については愛着自体を測定しているのかどうか疑問である。

一方，4 分類に基づく尺度としては，中尾・加藤(2004a)が ECR を日本語化して「成人愛着スタイル尺度」(ECR)を作成している。また，同じく中尾・加藤(2004b)は，「一般他者」に対する愛着を測定するために ECR を改変して「ECR-GO」を作成している。この 2 つの尺度においては，下位尺度として「見捨てられ不安」と「親密性の回避」があり，この 2 尺度の得点を組み合わせて，安定型，とらわれ型，拒絶型（軽視型に相当)，恐れ型を分類することも可能である。ECR と同様の視点に基づく別の尺度としては，丹波(2005)の「親への愛着尺度」があり，この尺度は「愛着不安」「愛着回避」という下位尺度から構成されている。Barthlomew や Brennnan の考え方に基づくこれらの尺度の問題点としては，以下の点があげられる。

1) 4 類型論の出発点となった Brennan et al.(1998)による既存の愛着尺度の因子分析は，不安と回避という 2 因子で単純構造を満たしているとは言いがたい。また，各因子に負荷の高い尺度をみると，不安因子と関連するはずのアンビヴァレンス尺度が回避因子に負荷しているとか，安心基地に関する尺度が不安因子ではなく回避因子に（負の方向で）負荷しているなど，この 2 因子を「不安」と「回避」と命名すること自体にも疑問が残る。

2) 下位尺度が「(見捨てられ) 不安」と「親密性の回避」の 2 つに限られており，「(見捨てられ) 不安が低ければ（安定型愛着の特徴である）安心感が高い」と想定されている。しかし，見捨てられ不安が低いことがそのまま愛着特有の安心感の高さと同じであるかどうかは疑問である。

3) Bowlby と Ainsworth の視点から考えると，「拒絶型」(軽視型) と「恐れ型」を区別することが妥当かどうか疑問である。つまり，拒絶型（軽視型）の特徴も恐れ型の特徴も，

Bowlby-Ainsworth モデルでは「回避型」に相当すると考えられる。実際，他項目式ではなく強制選択法を用いて分類すると，4 分類方式で選ばれた「恐れ型」の多くが 3 分類方式では「回避型」に分類されるという報告がある（大石・宇恵, 2000）。

4）Bowlby と Ainsworth があげた「安定型」「回避型」「アンビヴァレント型」の特徴は，他のタイプに比べて相対的にそのような特徴が顕著であるということであり，他のタイプの特徴がまったくみられないということではない。そうだとすると，「安定型」「回避型」「アンビヴァレント型」のそれぞれの特徴（傾向）を別々に測定し，それらの得点の分布から愛着のタイプまたはパターンを考えたほうがよいと考えられる。

本研究では，以上のような問題意識に基づき，Bowlby-Ainsworth モデルにできるだけ忠実に，「安定型」「回避型」「アンビヴァレント型」の特徴を測定する質問紙尺度を作成し，信頼性と妥当性の検討を行う。

方　法

1．新たな愛着尺度

項目の収集においては，筆者の他に２名の学部生により，Bowlby-Ainsworth による愛着の定義に忠実に，安定型，回避型，アンビヴァレント型の愛着パターンを表す項目案を作成した。詫間・戸田(1988)，中尾・加藤(2004a, b)，丹波(2005)，山口(2009)の愛着尺度を参考にして項目例を収集し，これらの項目を KJ 法によって整理した。項目作成にあたっては，項目が回答者にとって実感的に理解でき，回答しやすいものであるように，文章を工夫した。こうして収集された項目は，安定型 11 項目，回避型 13 項目，アンビヴァレント型 14 項目の計 38 項目であった。回答選択肢は，「まったくあてはまらない／あまりあてはまらない／どちらでもない／だいたいあてはまる／非常にあてはまる」の 5 件法であり，1～5 点に換算した。

これらの項目で尋ねる愛着の対象については，青年期には親以外の他者が愛着対象になることを考慮し，愛着対象を親に限定せず，「あなたが最も心の支えにしている人（1 人）」とし，「父・母・兄弟姉妹・祖父母・友達・恋人・配偶者・その他」の中から選択できるようにした。そして，各項目では，愛着対象を「その人」と表現した。

2．妥当性検討のための尺度

妥当性の検討には，「改訂版 UCLA 孤独感尺度・日本語版」（諸井，1991）〔4 件法〕と「甘え尺度」（谷，2000）〔5 件法〕を用いた。

甘え尺度については，3 下位尺度のうち，「直接的甘え」(9 項目）と「屈折的甘え」(9 項目）を使用した。なお，「直接的甘え」とは，他者からの助け，慰め，理解などを素直に求める傾向であり，「屈折的甘え」とは，「すね」や「ひがみ」などの形で表出される甘えである。

甘え尺度と孤独感尺度の全項目を以下に示した。

〔直接的甘え尺度〕

1）私は，何事につけ人をたのみにしたいと思う。
2）私は，何かをするとき人をあてにしたいと思う。
3）私は，困ったことがある時に人にすがりたいと思う。
4）私は，困ったことがあると人に何とかしてほしいと思う。
5）私は，何事につけ人に後押しをしてほしいと思う。
6）私は，人に甘えたいと思う。

7) 私は，何事も人にまかせたいと思う。
8) 私は，悲しいことがあったときに人に慰められたいと思う。
9) 私は，悩みがあると人に相談したいと思う。

〔屈折的甘え尺度〕

1) 私は，物事が自分の思い通りにならないとひねくれる。
2) 私は，ちょっとしたことでもふてくされる。
3) 私は，自分が思った通りにならないとすねる。
4) 私は，物事が自分の思い通りにならないと気がすまない。
5) 私は，物事がうまく行かないとやけくそになる。
6) 私は，ちょっとしたことでくやしいと思う。
7) 私は，嫌なことがあるとむかつく。
8) 私は，ちょっとしたことでもひがむ。
9) 私は，ささいなことで人をうらむ。

〔孤独感尺度〕

1) 私は，自分の周囲の人たちと調子よくいっている。
2) 私は，人とのつきあいがない。
3) 私には，頼りにできる人がだれもいない。
4) 私は，ひとりぼっちではない。
5) 私は，親しい仲間たちのなかで欠くことのできない存在である。
6) 私は，自分の周囲の人達と共通点が多い。
7) 私は，今，だれとも親しくしていない。
8) 私の興味や考えは，私の周囲の人たちとはちがう。
9) 私は，外出好きの人間である。
10) 私には，親密感の持てる人たちがいる。
11) 私は，無視されている。
12) 私の社会的なつながりは，うわべだけのものである。
13) 私をよく知っている人はだれもいない。
14) 私は，他の人たちから孤立している。
15) 私は，望むときにはいつでも，人とつきあうことができる。
16) 私には，私を本当に理解してくれる人たちがいる。
17) 私は，たいへん引っ込み思案なのでみじめである。
18) 私には，知人はいるが，私と同じ考えの人はいない。
19) 私には，話しかけることのできる人たちがいる。
20) 私には，頼りにできる人たちがいる。

愛着が安定型の人は，必要なときには安心や慰めを求めて他者に依存することができ，他者への不信感は少ないので，孤独感は低いはずである。甘えについても，屈折した甘えではなく素直な甘えを示すと思われる。これに対して，回避型の人は，他者への不信感があり，本当の意味では他者に依存できず，甘えも抑制しがちであると考えられる。次に，アンビヴァレント型の人は，他者に対して依存はするが，不信感もあるため，孤独感が強く，素直な甘えと屈折した甘えを同時に示すのではないかと思われる。

妥当性検討に用いる尺度の相関関係における仮説は，以下のとおりである。

(1) 安定型の愛着得点は，直接的甘えと正の相関，屈折的甘えとは無相関か負の相関を示し，孤独感とは負の相関を示すであろう。

(2) 回避型の愛着得点は，直接的甘えと無相関か負の相関，屈折的甘えとは正の相関を示し，孤独感とは正の相関を示すであろう。

(3) アンビヴァレント型の愛着得点は，直接甘えおよび屈折的甘えと正の相関を示し，孤独感とは正の相関を示すであろう。

3．調査方法・回答者

国立 A 大学と国立 B 大学の教職科目の授業で，担当教員の許可を得て質問紙を配布し，その場で回収した。調査時期は，2015 年 11 月であった。回答は，欠損値のなかっ 270 名分を用いた。回答者の性別は男性 133 名，女性 137 名，平均年齢は 19.64 才であった。

結果と考察

1. 因子分析および信頼性

本研究で作成した愛着パターン尺度を国立A大学と国立B大学の大学生に実施し，欠損値のなかった270名分を用いて因子分析を行った。因子分析の結果，固有値の減衰から3因子が妥当と判断された。しかし，3因子のどれにも負荷の低い項目や複数の項目に負荷の高い項目が存在したので，これらの項目を除き，再度，因子分析（主因子法プロマックス回転）を行った結果を表1に示した。この段階で9項目が削除された。項目内容から，因子1は「アンビヴァレント型」，因子2は「安定型」，因子3は「回避型」と解釈された。3因子での累積寄与率は46.02%であった。

表1　愛着パターン尺度因子分析結果（パターン行列；項目数を揃える前）

因子名（α）	項目	因子1	因子2	因子3
アンビヴァレント型	a24　その人が私を大切に思っているかどうかを何度も確認したくなる	**0.83**	0.17	0.01
	a9　その人から大切な人と思われているかどうか不安である	**0.74**	-0.17	-0.12
	a27　その人の態度がそっけないと見捨てられるのではないかと心配になる	**0.74**	0.01	0.03
	a33　私がいつも一緒にいたがるので，その人はうっとうしいのではないか思う	**0.74**	0.00	0.03
	a6　その人から本当に愛されているのかどうか心配になる	**0.70**	-0.16	-0.09
	a21　その人から常に関心を向けられていないと不満である	**0.69**	0.21	0.07
	a18　私がその人を独占したがるので，その人は嫌がっているのではないかと思う	**0.66**	-0.04	-0.01
	a30　必要なときにその人がそばにいてくれないとイライラする	**0.60**	0.24	0.06
	a36　その人から愛されているという思いと愛されていないという思いが半々である	**0.58**	-0.30	-0.08
	a15　その人が本心から私と親しくしてくれているのかどうか心配になる	**0.57**	-0.32	-0.01
	a37　私は，その人と気持ちの上で一体になりたいと強く願っている	**0.54**	0.33	-0.04
	a3　ちょっとしたことで，すぐその人に不信感を持ってしまう	**0.45**	-0.21	0.08
安定型	a32　私が疲れているときや病気のときに，その人は優しくしてくれると思う	-0.02	**0.78**	0.17
	a26　私が何かで苦しんでいるとき，その人は私の気持ちをわかってくれると思う	0.02	**0.70**	-0.10
	a23　私が困っているときには，その人は何らかの形で助けてくれると思う	-0.02	**0.70**	0.02
	a20　私が失敗しても，その人なら受け入れてくれると思う	-0.05	**0.69**	0.09
	a11　その人は，私がつらいときにはきっと一緒にいてくれると思う	0.10	**0.68**	-0.03
	a14　私が落ち込んでいるときには，その人はきっと慰めてくれると思う	0.19	**0.65**	-0.08
	a29　その人は，良い面も悪い面も知ったうえで私を受け入れてくれると思う	-0.09	**0.62**	-0.04
	a17　その人なら，私が欠点や弱い面を見せても受け入れてくれると思う	0.00	**0.61**	-0.07
	a8　その人に励ましてもらうと元気が出る	0.25	**0.55**	-0.09
回避型	a25　その人に自分の弱い面を知られたくない	0.14	0.09	**0.72**
	a31　自分のことでその人に頼ることに対しては抵抗がある	0.08	-0.01	**0.71**
	a22　その人に自分の悩みを話すことを恥ずかしく感じる	0.15	0.08	**0.71**
	a16　困ったことがあっても，できるだけその人には相談しないでおきたい	-0.14	0.05	**0.64**
	a13　その人に慰めや助言を求めることに抵抗はない（逆転項目）	0.13	0.15	**-0.56**
	a1　困ったことがあっても，その人に助けてもらわず自分で解決したい	-0.10	0.01	**0.53**
	a28　その人に心を開いて話すことに抵抗を感じる	0.16	-0.25	**0.48**
	a34　その人に自分の素直な気持ちを話すことに抵抗はない（逆転項目）	0.03	0.24	**-0.47**
因子寄与（他の因子の影響を無視）		6.78	6.86	5.25
		累積寄与率　46.02%		

因子間相関		因子2	因子3
	因子1	-0.46	0.33
	因子2		-0.54

次に，項目数をできるだけ削減する必要性から，合計 24 項目について因子分析（主因子法プロら，各因子に負荷する項目を 8 項目に絞り，マックス回転）を行った結果を表 2 に示した。

項目内容から，因子 1 は「アンビヴァレント型」，因子 2 は「安定型」，因子 3 は「回避型」と解釈された。3 因子での累積寄与率は，47.23%であった。逆転項目の得点を逆方向に変換し，それぞれの因子に負荷する項目群のα係数を算出すると，アンビヴァレント型が 0.88，安定型が 0.87，回避型が 0.84 であった。愛着パターン尺度（24 項目）における各下位尺度のα係数はすべて 0.8 を超えており，高い信頼性が確認された。

因子間相関をみると，因子 1 と因子 2，因子 3 と因子 2 の相関は，中程度の負の相関であり，安定型―アンビヴァレント型，安定型―回避型は，相反するものであることがわかる。また，因子 1 と因子 3 の相関は弱い正の相関であるが，これは，アンビヴァレント型あることから，うなずける結果である。また，因子 1 と因子 3 の相関は弱い正の相関であるが，これは，アンビヴァレント型も回避型も不安定愛着という点では同じであることから

表 2　愛着パターン尺度因子分析結果（パターン行列；項目数を揃えた結果）

因子名(α)	項目	因子 1	因子 2	因子 3
アンビヴァレント型（α=0.88）	a24　その人が私を大切に思っているかどうかを何度も確認したくなる	**0.82**	0.13	-0.01
	a33　私がいつも一緒にいたがるので，その人はうっとうしいのではないか思う	**0.73**	-0.06	0.01
	a9　その人から大切な人と思われているかどうか不安である	**0.72**	-0.19	-0.12
	a27　その人の態度がそっけないと見捨てられるのではないかと心配になる	**0.72**	-0.02	0.03
	a21　その人から常に関心を向けられていないと不満である	**0.68**	0.15	0.04
	a6　その人から本当に愛されているのかどうか心配になる	**0.65**	-0.19	-0.08
	a18　私がその人を独占したがるので，その人は嫌がっているのではないかと思う	**0.65**	-0.09	-0.02
	a30　必要なときにその人がそばにいてくれないとイライラする	**0.59**	0.21	0.04
安定型（α=0.87）	a32　私が疲れているときや病気のときに，その人は優しくしてくれると思う	-0.02	**0.77**	0.15
	a23　私が困っているときには，その人は何らかの形で助けてくれると思う	-0.01	**0.71**	0.01
	a11　その人は，私がつらいときにはきっと一緒にいてくれると思う	0.12	**0.70**	-0.04
	a20　私が失敗しても，その人なら受け入れてくれると思う	-0.08	**0.68**	0.09
	a26　私が何かで苦しんでいるとき，その人は私の気持ちをわかってくれると思う	0.02	**0.66**	-0.13
	a14　私が落ち込んでいるときには，その人はきっと慰めてくれると思う	0.19	**0.65**	-0.09
	a29　その人は，良い面も悪い面も知ったうえで私を受け入れてくれると思う	-0.09	**0.62**	-0.05
	a17　その人なら，私が欠点や弱い面を見せても受け入れてくれると思う	-0.03	**0.59**	-0.08
回避型（α=0.84）	a25　その人に自分の弱い面を知られたくない	0.14	0.10	**0.73**
	a31　自分のことでその人に頼ることに対しては抵抗がある	0.07	0.00	**0.72**
	a22　その人に自分の悩みを話すことを恥ずかしく感じる	0.15	0.09	**0.72**
	a16　困ったことがあっても，できるだけその人には相談しないでおきたい	-0.16	0.06	**0.65**
	a13　その人に慰めや助言を求めることに抵抗はない（逆転項目）	0.14	0.16	**-0.56**
	a1　困ったことがあっても，その人に助けてもらわず自分で解決したい	-0.12	-0.01	**0.53**
	a28　その人に心を開いて話すことに抵抗を感じる	0.15	-0.21	**0.51**
	a34　その人に自分の素直な気持ちを話すことに抵抗はない（逆転項目）	0.00	0.22	**-0.47**
因子寄与（他の因子の影響を無視）		5.18	5.75	4.94
		累積寄与率 47.23%		

因子間相関		因子 2	因子 3
	因子 1	-0.43	0.34
	因子 2		-0.54

表3 男女別にみた愛着得点

		人数	平均	標準偏差	*F*	有意確率
安定	男性	133	30.55	5.40	21.71	**
	女性	137	33.44	4.77		
回避	男性	133	19.80	5.92	7.32	**
	女性	137	17.84	5.97		
アンビヴァレント	男性	133	14.98	5.54	0.03	n.s.
	女性	137	15.09	5.97		

** $p<.01$ $N=270$

表4 愛着対象の内訳

	愛着対象							合計
	1. 母親	2. 父親	3. 祖父母	4. 兄弟・姉妹	5. 友人	6. 恋人	7. その他	
男性	43 32.3%	11 8.3%	2 1.5%	4 3.0%	50 37.6%	13 9.8%	10 7.5%	133 100.0%
女性	71 51.8%	8 5.8%	5 3.6%	5 3.6%	37 27.0%	9 6.6%	2 1.5%	137 100.0%
合計	114 42.2%	19 7.0%	7 2.6%	9 3.3%	87 32.2%	22 8.1%	12 4.4%	270 100.0%

うなずける結果である。この24項目版を「愛着パターン尺度」(Attachment Pattern Scale: APS)と命名して，分析に使用した。

この愛着パターン尺度における安定型，回避型，アンビヴァレント型の得点の平均値と標準偏差を男女別に示したのが表 3 である。安定型得点においては性差がみられ，女性の得点が有意に高かった。また，回避型得点においても性差がみられ，男性の得点が有意に高かった。このような性差がどうして生じるのかについては，今後検討が必要である。

また，表 4 には，今回の調査で愛着対象として誰が選ばれていたかについての集計を示した。愛着対象の内訳をみると，男性・女性ともに，愛着対象が「友達」や「恋人」という人もいるが，「母親」という人も多く，とくに女性は「母親」という人が半数以上である。ただ，この結果を見る際には，今回の回答者の多くが大学1・2年生であることを考慮する必要があるだろう。

2. 愛着パターン尺度の妥当性

妥当性の検討には，諸井(1991)の「孤独感尺度」と谷(2000)の「甘え尺度」(直接的甘えと屈折的甘え）を用いた。妥当性検討の前に，各尺度の信頼性分析を行った。孤独感尺度（20項目）は，1 因子構造であるため，全体でα係数を算出し，α係数を下げている 1 項目を削除した。残りの 19 項目でのα係数は 0.91 であり，高い信頼性が確認された。次に，甘え尺度の下位尺度である「直接的甘え」(9 項目）および「屈折的甘え」(9 項目）のα係数は，それぞれ 0.84，0.89 であり，やはり高い信頼性が確認された。そこで，これらの尺度それぞれの合計得点と愛着パターン尺度の下位尺度得点との相関係数を用いて，妥当性の検討を行った。

愛着の安定型得点は，甘えとはほぼ無相関

表5　愛着と甘えおよび孤独感との相関

	回避	アンビヴァレント	直接的甘え	屈折的甘え	孤独感
安定	−0.51 **	−0.36 **	0.10	−0.04	−0.47 **
回避		0.30 **	−0.16 *	0.12	0.38 **
アンビヴァレント			0.16 *	0.23 **	0.32 **

* $p<0.05$　** $p<0.01$　$N=270$

であるが，孤独感とは中程度の負の相関を示した。安定型得点が直接的甘えと無相関に近かったのは，直接的甘え尺度の内容が他者に対するストレートな依存欲求の表明だからかもしれない。愛着パターン尺度で測定される安定型愛着は苦痛なときに愛着対象が支えや助けを与えてくれることによる安心感であり，このような安心感があると，逆説的に依存の度合いが減る面があることから，安定型愛着得点と直接的甘えの相関が低くなったとも考えられる。安定型愛着得点と孤独感が有意な負の相関を示したのは予想通りであった。安定型愛着の人は，困れば他者に助けを求めることができ，他者との親密な関係をポジティヴに評価している人であるから，孤独感を感じることは少ないので，このような相関が見られたのであろう。

次に，愛着の回避型得点は，わずかな相関ではあるが直接的甘えと有意な負の相関を示した。回避型の人は，愛着関係を回避することから直接的甘えを抑制すると考えられるので，この結果は妥当と考えられる。予想に反して，回避型は，屈折的甘えとはほぼ無相関であった。回避型は，内には屈折した甘えを秘めていると思われるが，必ずしも常にこれを表出するとは限らないのであろう。また，回避型得点は，孤独感とは有意な弱い正の相関を示した。回避型の人は他者との親密な関係を避けることから，この結果は妥当である。

最後に，愛着のアンビヴァレント型得点は，直接的甘え，屈折的甘え，孤独感のすべてと有意な低い正の相関を示した。アンビヴァレント型の人は，他者への依存欲求も強いが，他者への不信や不満からすねたりひがんだりするなど屈折した依存のあり方を示すので，直接的甘えと屈折的甘えの双方と相関がみられたのであろう。また，このような傾向があると他者との関係は不安定になり，他者から距離を置かれたりもするので，孤独感が強くなると考えられる。

問題点と課題

まず因子構造については，本研究では明確な因子構造が得られたが，今後さらに多くの回答者に実施することによって因子構造の安定性を確かめなくてはならない。

信頼性については，内的整合性は確認されたが，時間的安定性を調べるために再検査信頼性の検討が必要である。

妥当性については，愛着と関連する様々な変数との関連を検討することが不可欠である。そのうえで，今回は行わなかったが，他の愛着尺度との関連の検討も重要である。例えば，本尺度を 4 類型の視点に基づく尺度と組み合

わせて実施し，それぞれの尺度が測定しているものを明らかにしていく必要がある。

そして，青年・成人用の愛着尺度として完成させるためには，より幅広い年齢集団に実施し，妥当な結果が得られることを確認する必要がある。

引用文献

Ainsworth, M.D. (1989). Attachment beyond infancy. *American Psychologist*, **44**, 709-716.

Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patters of attachment: a psychological study of the strange situation.* Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.

Bartholomew, K, & Horowitz, L.M. (1991). Attachment styles in young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.

Bowlby, J. (1979/1989). *The making and breaking of affectional bonds.* London: Routledge. 作田　勉（監訳）(1981). ボウルビイ母子関係入門　星和書店

Bowlby, J. (1988). *A secure base: parent-child attachment and healthy human development.* London: Routledge. ジョン・ボウルビイ／仁木　武（監訳）(1993). 母と子のアタッチメント―心の安全基地　医歯薬出版

Brennan, K.A., Clark, C.L., & Shaver, P.R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: an integrative overview. In J.A. Simpson & W.S. Rohles (Eds.) *Attachment theory and close relationships.* New York: The Guilford Press. pp.46-76.

Cassidy, J. (2008). The nature of the child's ties. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.) *Handbook of attachment: theory, research, and clinical applications (2nd ed.).* New York: The Guilford Press. pp.3-22.

Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.

諸井克英 (1991). 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討　静岡大学文学部人文論集, **42**, 23-51.

中尾達馬・加藤和生 (2004a). 成人愛着スタイル尺度(ECR)の日本語版作成の試み　心理学研究, **75**, 154-159.

中尾達馬・加藤和生 (2004b). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討　九州大学心理学研究, **5**, 19-27.

丹羽智美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程　パーソナリティ研究, **13**, 156-169.

大石史博・宇恵　弘 (2000). 青年期における愛着の基礎的研究(1)：成人用愛着尺度作成の試み　関西福祉科学大学紀要, **4**, 79-86.

詫間武俊・戸田弘二 (1998). 愛着理論からみた青年の対人態度―成人版愛着スタイル尺度作成の試み―　東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.

谷　冬彦 (2000). 青年期における「甘え」の構造　相模女子大学紀要, **63A**, 1-8.

山口正寛 (2009). 愛着機能尺度(Attachment-Function Scale) 作成の試み　パーソナリティ研究, **17**, 157-167.